

（実践報告）

教師の成長を促す学校現場における省察支援の実践

～「授業改善推進チーム活用事業」の取組に「ALACTモデル」を活用して～

小林 豊（北海道旭川市立永山西小学校）

I. はじめに

令和3年11月15日中央教育審議会は『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて」と題した審議まとめを示した。その中では、大きな変化が生じている社会の中で教師が学び続ける存在となることが強く期待されている。

令和4年7月1日より教員免許更新制は発展的に解消され、今後は、教師や学校のニーズや課題に応じて具体的な目標を設定し、自らの学びを適切に振り返りながら、主体的かつ計画的に研修を進めていくことが一層求められる。一方で、現在は働き方改革が推進されており、限られた時間の中で研修に努めていくためには、どのような形が望ましいのか、その在り方が問われている。

本稿では、このような背景を踏まえ、学校現場において教師の成長を実現していくための学びの在り方を模索した実践を紹介する。

II. 実践の概要

本実践は、2022年度、「ほっかいどう学力向上推進事業」の1つである「授業改善推進チーム活用事業」と関連付けたものである。これは、実践的指導力を有する教員が、T・Tによる学習指導や全教職員との協働による授業改善、校内研修での資料提供、教員との協議等を実施、巡回することで、地域全体の学力の向上を図るというものである。

本実践は、筆者がこの授業改善推進教諭として勤務した1年間の中で行ったものである。主な活動としては、研修会の実施（図1）、師範授業（図2）、通信による情報発信（図3）などが挙げられる。

その中でも中心となるのが、「各学級の授業参観と先生方との振り返り」である。国語・算数の授業を中心に、各学級の授業を年間6～8回参観することが



図1 近隣校と連携した研修会の実施




図2 若手教員への師範授業の実施



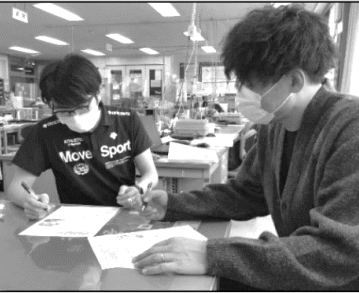
図3 授業改善推進チーム通信

できた。授業参観後は放課後の時間を使い、15～20分程度の振り返りを授業者の先生と行った。この「授業参観→振り返り」について、先行研究を踏まえてサイクル化したものが本実践である（図4）。教師が学び続ける存在として成長を続けていくためには、

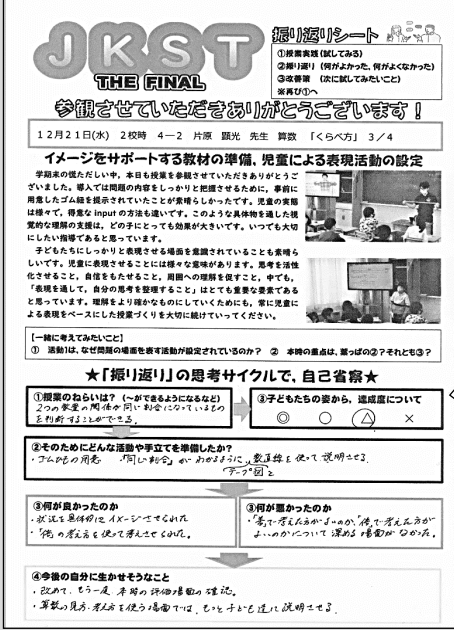
① 推進教諭による授業参観



② 1対1での振り返り



③ 振り返りシートの提出



振り返りシートの上段、授業参観後に推進教諭が書いておく部分である。授業者の良さや学級の子供たちの頑張りを中心に価値付けている。

併せて、1対1での振り返りの際に話し合いたい視点や内容についても載せている。

下段は、推進教諭との振り返り後に、授業者が書く部分である。振り返りを通して、自身の授業の成果や課題を整理し、今後の授業改善につながるように言語化してもらうことをねらいとした。

このシートはコピーしたものを推進教諭にも提出するようにし、共有化を図った。

図4 「授業参観→1対1での振り返り→振り返りシート提出」までの実際

学校現場においてどのような学びが求められるのかについて、実践を通して考察した。

Ⅲ. 先行研究の概要

1. 「経験学習」という考え方

松尾(2021)は職場における人の成長には「経験」が最も影響するという見解を示している。「その経験を振り返り、何らかの教訓を引き出して、次の状況に応用する」というサイクルによって真の成長につながるというものである。

松尾は、仕事経験による「直接経験」に、他者からの指導や研修などの「間接経験」を活かすことの重要性を述べており、これは学校現場における学びについても共通する。加えて、この「経験学習サイクル」(図5)を適切に回すために、行動を内省する習慣を持つことの必要性を述べており、振り返りの質が人材の成長に大きく関わることを伝えている。

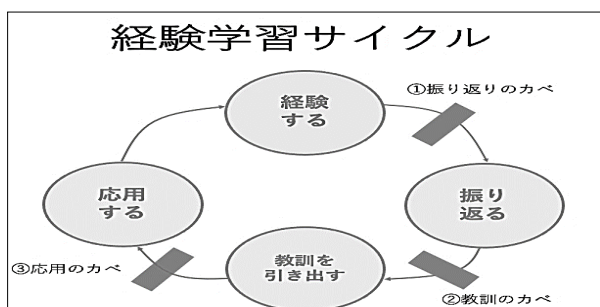


図5 経験学習のサイクル (松尾 2021)

2. 「ALACTモデル」について

山辺(2013)はコルトハーヘン(2010)の研究を取り上げ、これまでの教師教育に対する「技術的合理性アプローチ」の課題を指摘している。技術的合理性アプローチとは、「教育に関する理論を知識として学べば、教師はその知識を教室における実践に適用し、よい教育を行うことができる」という考え方である。

コルトハーヘンは技術的合理性アプローチに代わるものとして「リアリスティック・アプローチ」を提唱し、その中で教師の成長につながる一連の手続きを「ALACTモデル」として示した(図6)。コルトハーヘンは教員がこの省察の流れを自分でできるようになることを求めている。中でも図にある②から③への段階が重視されており、ここで教師としての成長度合いが大きく変わってくることを強調している。

本実践は、経験学習の理論を基に、このALACTモデルのサイクルを取り入れて構成したものである。

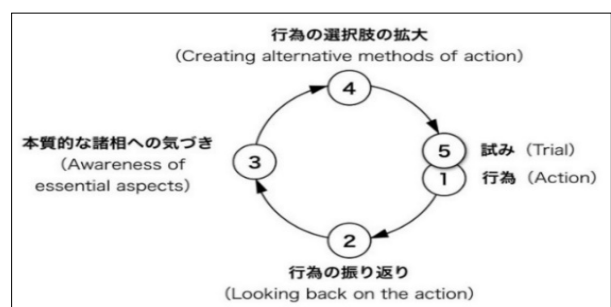


図6 ALACTモデル (コルトハーヘン 2010)

IV. 本実践の検証方法と結果について

1. インタビュー調査

本実践の効果を検証するために、経験年数などを踏まえ、9名の先生に協力をいただきインタビュー調査を行った。内容は本実践の中心となる、①授業参観②1対1で行う振り返り③振り返りシートの記入についての3点である

インタビューの際には「学びがあるか」「負担感があるか」の2つの視点を設定した(図7)。設定の理由としては、今後の研修が働き方改革と併行して進めていくことの必要性が挙げられる。業務が錯綜する日々の中で、負担感だけが残る取組では持続が困難となるからである。ただし、基本的には先生方の「学びの有無」を重視した。学びの手応えを感じることができれば負担そのものとはならないからである。学びと負担感、それぞれの程度やバランスが重要であると考えた。

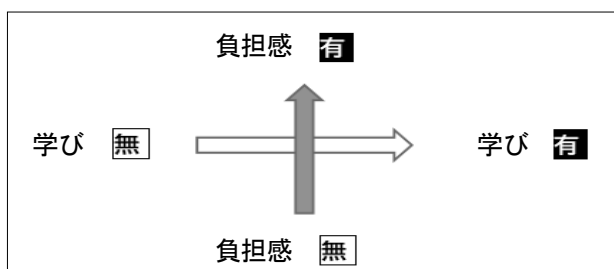


図7 学びと負担感の相関

(1) 授業参観について

先生方の回答からは、授業参観されるということに対して負担感がありつつも、学びとしての手応えを強く感じていることが分かった。「授業を客観的に見てもらう機会」が、授業力を高める上で欠かせないことを先生方自身が認識されていると感じた。

また、参観されることの負担感については、A教諭の「見られるのは1人だけ」という回答(図8)があるように、それほど大きくはないことが分かる。児童にとっても「ありのまま」の姿で授業に臨むことができる状況であると考えられる。

(2) 授業後の1対1での振り返りについて

回答からは、多くの先生が推進教諭との1対1による振り返りを肯定的に捉えていることを感じた。B教諭の回答(図9)にある「1対1による振り返りは質問もしやすく、自分の課題についてじっくりと考えられる」といった点が長所として特に多く挙げられ

ていた。授業を通して自分が感じたことについて、気兼ねなく意見したり質問したりできることは、先生方にとって貴重な学びの機会になることを感じた。

一方で、時間的な負担が生じることは否定できない。F教諭はインタビューの中で時間の面に対する負担を回答された(図10)。F教諭の家庭は、共働きかつ、子供が小さいという実態がある。この課題を解決するためには、学校に関わる業務の取捨選択や人員を確保した上での分業が必要になると考えるが、研修において意識していくべき視点である。

【A教諭 (教員歴1年目)】→学び有 負担感有

- ・緊張はある。でもそこまで嫌な感じはない。それは、見られるのは1人だけということもあるかもしれない。
- ・いつもよりも緊張感をもってできる。感覚が研ぎ澄まされるような感じがする。全体を見て動こうとする意識が高まる。

図8 授業参観について：A教諭の回答

【B教諭 (教員歴4年目)】→学び有 負担感無

- ・全体での講義形式では「なるほど」で終わってしまうことが多い。
- ・1対1の場合は、問答を通して気付くことができる。それがうれしい。
- ・課題が自分の中に、ダイレクトに刺さる。自分事として考えられる。

図9 1対1の振り返りについて：B教諭の回答

【F教諭 (教員歴16年目)】→学び有 負担感有

- ・学びしかない時間だった。自分の経験年数で指導していただく時間があつたことを大変有り難く思っている。
- ・やはり「時間」という面で、業務が飽和状態の中で何かを増やすというのはこの取組に限らず厳しい。

図10 1対1の振り返りについて：F教諭の回答

(3) 振り返りシートの記入について

振り返りシートへの記入については、教員としてのキャリアによって違いが見られた。B教諭の「書くことで具体的に終わることができる。本質が見えてくる」(図11)という回答があるように、初任段階の先生方を中心に、「学びを整理できる」という意義を感じていることが分かった。記入しているその時間においても思考を働かせ、自身の経験を知識と結び付けようとすることは省察そのものであり、こちらが記入欄を設けた意図と合致する。

一方、中堅・ベテランのキャリアとなるF教諭からは、「話し合いをした時点で学びになっており、それを文字に起こす作業をする必要性が感じられなかった」という回答があった(図12)。この回答からは、「対話の段階で十分納得できている」ということが想像される。経験年数に限らず、一人一人に合った学びの整理を保障することが必要であると感じた。

【B教諭 (教員歴4年目)】→学び有 負担感無
 ・自分で振り返って書くことで、授業を思い出して整理することができる。話ただけで終わってしまうと、そのままになってしまう。
 ・書くことで具体的に終わることができる。本質が見えてくる。

図11 振り返りシートの記入について：B教諭の回答

【F教諭 (教員歴16年目)】→学び有 負担感有
 ・振り返りの中でのご指導は大変ためになり、これまでの振り返りシートを取り溜めている。
 ・反面、自分が記入する部分については、話し合いをした時点学びになっており、それを文字に起こす作業をする必要性が感じられなかった。

図12 振り返りシートの記入について：F教諭の回答

2. 自己評価アンケート

本実践を含む、授業改善推進チームによる取組には、「授業改善につながる3つの視点」が評価項目として設定された。先生方にはこの視点についての自己評価アンケートを5月と12月に依頼し、この結果から、先生方が自身の成長をどう捉えているかについて考察した。

12月の自己評価アンケートの結果(表1)からは、約半年間の取組が一定の成果につながっていることを感じた。特に12月では全項目において「1」の評価が0%になっており、1つ1つの項目を先生方が意識して取り組んできたことが反映されている。

肯定的な評価とする「3」と「4」の評価を合わせると、多くの項目で80%を超える結果へと変容した。中でも、視点2「説明するなどの言語活動の充実」については肯定的な回答が大幅に増えている。この点は、授業参観を継続する中で筆者自身も強く感じていたことである。どの学級においても子供たちの発話量が増え、考えを伝え合う子供たちの姿が顕著に見られた。

ALACTモデルを取り入れたことで「実践→振り返り・課題の明確化→具体的な改善策→実践…」とい

表1 「授業改善3つの視点」に対するアンケートの結果(12月)

視点	項目	具体的な観点	自己評価の割合(%)			
			4	3	2	1
【視点①】 身に付けさせたい 力の明確化	1	単元(題材)を通して身に付けさせたい力を明確にし、指導と評価の計画を作成している。	14.3	85.7	0.0	0.0
	2	教科書、学習指導要領の指導事項を意識して教材研究をしている。	21.4	64.3	14.3	0.0
	3	ねらいに正対した学習活動を位置付け、評価規準との関連を図っている。	21.4	71.4	7.2	0.0
	4	児童の学習状況を評価規準に基づいて見取っている。	0.0	100	0.0	0.0
【視点②】 言語活動の充実	1	児童が自ら課題を設定し、解決に向けて話し合うなどの学習活動を取り入れている。	21.4	57.2	21.4	0.0
	2	言語活動について、国語科だけではなく、各教科等を通じて取り組んでいる。	28.6	64.3	7.1	0.0
	3	児童が資料や文章、組立てなどを工夫して、発言や発表をできるようにしている。	7.1	71.4	21.4	0.0
	4	学級を互いに学び合う学習集団に育てている。	14.3	78.6	7.1	0.0
【視点③】 一人一台端末 の活用	1	教科の目標の達成に向け、1人1台端末を効果的に活用している。	14.3	71.4	14.3	0.0
	2	1人1台端末を教職員と児童がやりとりする場面で活用している。	14.3	50.0	35.7	0.0
	3	1人1台端末を児童同士がやりとりする場面で活用している。	7.1	57.2	35.7	0.0
	4	1人1台端末を児童が個人で活動する場面で活用している。	35.7	50.0	14.3	0.0

う一連のサイクルが生まれた。そして、そのサイクルが継続されたことにより、先生方の授業改善に対する実感につながっていったと考える。

V. おわりに

本実践を通して、学校現場においても省察のサイクルを回すことで、先生方は学びの手応えや成長を得られることを感じた。今後はこのような個に応じた学びをサイクル化していくことが一層求められる。

本実践は、学校現場における学びについて1つの方向性を示すことができたと考えている。研修の運営、実施において、「与える、教える」から、「引き出す、表現させる」ということより意識し、その過程を通して「学ぶ意義の実感」を先生方に生み出していくことの重要性を改めて認識することができた。

本実践の課題として、次の2点が挙げられる。

1 点目は、インタビュー対象者数を広げ、より多くの先生方から意見を集約して本実践の効果を検証することである。

2 点目は、このような学校現場における学びを持続可能なものとする組織の仕組みを提示することである。本実践は、授業改善推進チームの事業が終了した際の継続が難しくなる。どの学校においてもこのような学びの在り方が具現化できるように、校内の体制を踏まえた無理のない形を検討していきたい。職務上の研修である以上、勤務時間内での実現が可能なものへ改善することも必要である。

教師にとって学ぶことは、教師で在り続けるための必要条件であると考えます。しかし、様々な事情や時間的な制約を抱える先生方にとって、学びに対する余裕が生まれにくい現状も事実である。私はこの課題について、「学校現場の一教師」として今後も向き合っていきたい。それは、理論と実践を常に往還することができ、常に現場の先生方の立場、思いに立って「現実的」に考えられるからである。

子供、教職員、学校、地域など、その実態は全てが異なる。だからこそ、そこに置かれた自分たちで、自分たちに合った「学びの在り方」を見出し、それを具現する「やり方」を模索し続けていきたい。

参考文献

- 1) 『令和の日本型学校教育』を担う 新たな教師の学びの姿の実現に向けて（審議まとめ） 令和3年11月15日 中央教育審議会 「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会
- 2) 『初等教育資料』2022年9月号 文部科学省
- 3) 松尾睦(2015)『「経験学習」ケーススタディ』ダイヤモンド社
- 4) 上條晴夫編(2015)『教師教育—いま、考えるべき教師の成長とは—』さくら社
- 5) F・コルトハーヘン(2010)『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ—』学文社
- 6) 成功から学ぶ「経験学習」を取り入れた1on1とは —北海道大学大学院経済学研究院教授・松尾睦さん—
https://workmill.jp/jp/webzine/20210413_matsuo/
2021年4月13日更新

『教育への扉』竹谷出版学術ジャーナル 第3巻, 第2号

発行日：2023年9月19日

発行元：竹谷出版（竹谷教材株式会社出版事業部）